中国人日本語学習者の場所を表す格助詞「で」と「に」の習得に影響する諸要因

初相娟（名古屋大学大学院・天津外国語大学）・
玉岡賀津雄（名古屋大学）・早川杏子（名古屋大学）

要　　旨　本研究は，中国人日本語学習者を対象に，場所を表す格助詞の「で」と「に」の習得においてユニット形成と中国語の「在」の干渉があるかを検討するために，48 問の調査文に対して，(1) 動詞の難易，(2) 自他動詞，(3) 格助詞の前に来る名詞の場所・位置の別，(4) 格助詞の「で」「に」，(5) 読解力の５つの変数を設定し，格助詞の正誤を予測する分類木分析を行った。読解力は，201 名の中国人日本語学習者に対する 16 問の読解テストの得点で上・中・下位群に分けた。分析の結果，読解力で分けた上・中・下の群の影響が最も強く，読解力が上がるほど，場所を表す格助詞の正答率が上がっていた。さらに，上位群では，場所と位置の影響が見られ，場所では動詞の難易，位置では格助詞の「で」「に」が影響していた。中位・下位群では，動詞の難易，その次に動詞の自他が影響していた。ユニット形成は上位群の位置の場合のみ見られ，「在」の干渉は見られなかった。このことから，場所を表す格助詞の「で」と「に」は，読解力別に動詞と名詞の特性が複雑に影響しながら習得が進んでいることがわかった。

キーワード　格助詞の習得　ユニット形成　分類木分析　中国人日本語学習者

1．研究目的

多くの日本語学習者にとって，場所を表す格助詞「で」と「に」は使い分けが難しいと言われている（久保田 1993，迫田 2001，津留他 1998，蓮池 2004a，2004b，福間 1996，水谷 1987，吉川 1987 など）。たとえば，次のような誤用が見られる。

（1）*ここにタバコを吸ってもいいですか。

（2）*今東京のアパートで住んでいます。（市川 2005）

上記の（1）と（2）のような誤用が現れるのは，学習者が格助詞の前の名詞を選択のヒントとし，「場所＋で」「位置＋に」というユニットが形成されているからだという指摘がある（迫田 2001）。また，とりわけ中国人日本学習者にとっては，（1）と（2）の正用文の場合，「ここでタバコを吸ってもいいですか」（可以在这吸烟吗），「今東京のアパートに住んでいます」（現在住在东京的公寓）のように，場所の「で」と「に」はともに中国語

の前置詞「在」に訳すことができるため，母語の中国語の「在」に干渉を受けている可能性があるという（岡田・林田 2007，上村・桝井 2002，村松 1987）。そこで，本研究は中国人日本語学習者を対象に，場所を表す格助詞「で」と「に」の習得に関して，次の２点を検証する。

1）「場所＋で」「位置＋に」のユニット形成があるか。

2）母語の中国語の「在」の干渉があるか。

2．研究背景と本研究のデザイン

迫田（2001）は中国人日本語学習者，韓国人日本語学習者，その他の多国籍の学習者それぞれ 20 名を対象に，穴埋め形式で「で」と「に」の使い分けを調査した。その結果，「で」と「に」の正答率は，格助詞の前に来る名詞の「場所」と「位置」によって異なっており，後続の動詞を考慮せずに「場所＋で」「位置＋に」という特定の名詞と格助詞の固まりで選択されている傾向が見られた。この理由から，迫田（2001）は，日本語学習者は「で」と「に」の使い分けに際し，独自のユニットを形成している可能性が高いと主張した。しかしながら，この調査では，どのような動詞が使用されたか明記されておらず，調査項目にも統制が不十分な点が見られる。また迫田（2001）では，学習者のレベルの基準を教育機関での学習時間としている。しかし，たとえば３年間日本語を学習したとしても，到達度には大きな個人差があり，学習時間の長さが，必ずしも日本語能力を反映しているわけではない。このように調査デザインや学習者のレベル統制に問題があることから，迫田（2001）の主張するユニット形成の信憑性については慎重に検討しなければならない。また同じくユニット形成を検討した蓮池（2004a，2004b）では，迫田（2001）とは異なった結果を得ている。蓮池（2004a，2004b）は，中国人日本語学習者および韓国人日本語学習者のそれぞれ中級 30 名，上級 30 名に調査した結果，「場所＋で」のユニット形成は見られなかったと報告されている。一方，「位置＋に」というユニットの傾向が一部見られたのは，中級の中国人日本語学習者のみであった。しかし，蓮池（2004a，2004b）の調査文を見ると「トイレはこの階段を上がって左にあります」「昨日，学校の前で交通事故があったそうです」「来週，鈴木さんのうちでパーティーがあるそうです」のように動詞「ある」が３回重複して使用されており，特定の動詞に対するパターンが結果に影響している可能性がある。その他にも，蓮池（2004a，2004b）では「この CD の中で一番好きな歌は何ですか」「その先生は私の大学で一番人気がある先生です」のように範囲を表す「で」の用法もまた調査文に含まれており，場所の「で」と「に」の習得の検討に適切な項目であったとは言い難い。そのため，蓮池（2008）では，蓮池（2004a，2004b）を踏まえ，調査文の動詞の要因を統制して自・他動詞を半分ずつ配置し，文法性判断テスト（「で」と「に」の正用，誤用の文はそれぞれ８文，合計 32 文）を用いて「名詞＋助詞」のユニット形成を検討した。その結果，「に」の過剰使用が見られたものの，やはりユニット形成は見られなかった。これは，迫田（2001）とは相反する結果である。ただ，蓮池（2008）では旧日本

語能力試験４級レベルの易しい動詞しか使われていないことや,「テーブルの下にかばんを置いてください」「いすにかばんを置いてください」のようにやはり同じ動詞が重複していることが結果に影響しているとも考えられる。以上の先行研究から分かるように，格助詞「で」と「に」のユニット形成の検討については，調査文の動詞の要因，学習者の日本語レベルを統制した上で，再度，検証を行うべきである。

また，誤用分析からは，中国人日本語学習者は母語の中国語の前置詞「在」の影響により「で」と「に」を混同しているという指摘もある（岡田・林田 2007，上村・桝井 2002，村松 1987）。中国語では，動詞による介詞の区別はなく，場所や位置は全て「在」で表示される。もし中国人学習者が母語の干渉を受けているならば，場所と位置の要因はランダムになるはずである。そこで本研究では，母語の中国語の「在」の干渉を検証するために，「で」と「に」がともに「在」に対応する調査文を作成することにした。

以上の日本語学習者の「で」と「に」の習得に関する先行研究の問題から，本研究では，中国人日本語学習者のそれらの習得に関わる要因を明確にするために，第１に「場所＋で」「位置＋に」のユニット形成があるかどうか，第２に母語の中国語の「在」の干渉があるかどうか，の２点を研究課題として，次のようなデザインで調査し，分析することにした。第１の要因は，名詞の別である。格助詞の前に来る名詞が「～の上／下／中／左」などの名詞がつく場合「位置」の名詞とし，それ以外の「学校」「東京」「駅」などの名詞は「場所」とした。たとえば「デパートの前で友達と話しました」「名前のシールを箱の表に貼ってください」の場合，「デパートの前」「箱の表」は位置名詞，「私はこれから部屋で本を読みます」「彼は東京で働いている」の場合，建物を表す「部屋」，地名を表す「東京」はともに場所名詞である。第２の要因は，動詞の自他である。蓮池（2008）で設定された要因を本研究でも検討するべく，調査文の動詞を自動詞と他動詞を半分ずつ配置した（自他両用の場合，調査文に使われている用法に従う）。第３の要因は，動詞の難易度（旧日本語能力試験で２級相当語か３・４級相当語か）である。L２学習の場合は，出現頻度の影響を受けやすいと言われている。そのため，24 語の２級相当語と 24 語の３・４級相当語のそれぞれの頻度について，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（国立国語研究所）の語彙頻度表に従って頻度を抽出し，t 検定で比較した結果，２級相当（低頻度）語と３・４級相当（高頻度）語の間には有意差が見られ[t (23) =-8.06, p<.001]，当該の難易度で分けた動詞の難易は頻度の面からも適切に分けられていることがわかった。さらに，学習者の教科書の主教材・副教材を調べた結果，１年生の場合，３・４級語はすべて既習項目であり，２級語はほとんど未習の語であった。それに対し，２年生と３年生の場合は３・４級語も２級語もともに既習項目であった。第４の要因は，読解力である。学習者のレベルを厳密に統制するため，読解テストによる群分けを行い，上位・中位・下位群を学習者の読解力とした。読解力は既存の日本語の語彙・文法等の言語知識から，文の意味やまとまった文章の意図を読み取る外国語学習の総合能力の１つの側面でもあり，そうした能力は日本語文における助詞の選択に強く関連していることを想定し，格助詞の習得の要因の１つとし

た。そして第５の要因は，格助詞「で」と「に」である。以上のそれぞれの影響を検討するために，本研究では多変量解析の手法の一つである決定木分析（分類木分析 classification tree）を用いた。分散分析などの方法では多変量の交互作用が複雑になると影響関係が分かりにくくなる。しかし，分類木分析では，これらの５つの要因（変数）の影響を同時に階層的かつ総括的に考察することができる。また，結果を樹木に描いてくれ，上にくるものほど影響力が強いことを示してくれるので，結果が視覚的で分かり易い（この種の分析としては，玉岡 2006，Tamaoka and Ikeda 2010 などを参照）。本研究では，以上の５つの要因（独立変数）で，「で」と「に」の正答・誤答（従属変数）を予測する分類木分析を行った。

３．調査項目の設定

格助詞「で」と「に」に関する調査項目を合計 48 問設定した。この 48 問は，動詞の難・易，自・他動詞，場所・位置，格助詞の「で」・「に」という刺激文に関する４つの変数（２×２×２×２）のそれぞれの組み合わせに対して３問ずつ設定した。各項目には「で」と「に」が選択肢に含まれており，それ以外の助詞を錯乱肢として２つ加えた四者択一式の問題であった。以下は，実際に使用した調査文である。問１で使われている動詞の「鳴く」は，日本語能力試験基準４級レベルの易しい動詞であり，自動詞である。「木の上」は位置を表す名詞であり，正解は「で」である。問２の「残す」は２級レベルの難しい動詞かつ他動詞であり，「実家」は場所名詞であり，正解は「に」である。

問１　小鳥は木の上＿＿＿鳴いている。　　１へ　　２に　　３を　　４で

問２　引越しの時，昔のアルバムを実家＿＿＿残してきた。　　１で　　２に　　３を　　４が

また，学習者に調査の意図を気づかれないように「で」と「に」の他に，以下の問３～４のように「へ」「を」などの助詞が正答となったダミー文を 10 文加えた。調査紙では合計 58 文提示されたが，分析対象としたのは「で」と「に」に関する 48 文のみである。

問３　自分の席＿＿＿戻ってください。　　１で　　２が　　３を　　４へ

問４　姉は恋人のためにセーター＿＿＿編んでいる。　　１の　　２を　　３で　　４に

「で」と「に」の使用には，日本語母語話者でも揺れがある。そこで，日本語母語話者 32 名に対し，本研究で使う全問題を，穴埋め形式で提示して，本研究で設定した正答と一致するかどうかを調べた。32 名による 48 問全体の正答率の平均は 96.09%（SD=3.56%）であった。なお，最も正答率が低かった問題でも，90.63%であり，すべての問題は 90%以上の選択率であったので，本研究の設定した正答とほぼ一致していると言えよう。さらに「で」が正答の 24 問（M=96.74%，SD=3.38%）と「に」が正答の 24 問（M=95.44%，

SD=3.68%）を，独立したサンプルの t 検定で比較した。その結果，有意な違いはなく[t（23）=1.21，p=.24，ns.]，「で」と「に」の選択率は同じであり，これにより，「で」と「に」の揺れは結果に影響せず，本研究の設定した問題文は適切であったと判断できよう。

4．日本語学習者

201 名の中国人日本語学習者に対し，上記の四者択一の助詞選択テストを行った。学習者の内訳は，1年生が 43 名，2年生が 78 名，3年生が 80 名であった（男性 52 名，女性 149 名）。全体の平均年齢は 21 歳で，標準偏差は1歳8ヶ月であった。さらに，これらの学習者の読解力を判定するため，読解テストを行った。本研究は日本語の読解力を文章の理解力と位置づけている。読解テストは大部分を日本語能力試験から借用し，日本語能力試験の設問に準拠した問題を作成した。この読解テストは4つのテキストからなる。各テキストにつき4問の問いが設定されており，合計 16 問（16 点満点）である。読解テストの結果，平均が 10.79 点，標準偏差が 2.79 点であった。読解テストの点数に基づいて，13 点以上を上位群（62 名），10 点から 12 点を中位群（70 名），9点以下を下位群（69 名）とした。48 問の格助詞の調査を 201 名の中国人日本語学習者に実施した結果，クロンバックの信頼性係数は，α=0.90 であり，信頼性が高いことが示された。

5．分析と結果

5.1 分析手法

本研究は決定木分析の一種で，頻度を予測する分類木分析の手法を使った。本研究では上記で設定した5つの独立変数（説明変数）で，格助詞の正誤を予測し，どれが強く影響するのかを見るため，各問題の正誤選択者数を質的データと扱い，分類木分析の手法で分析を行った[1]（読解力別の各問題の選択者数は付記を参照）。

5.2 分析の結果

分類木分析の結果，図1の樹形図に示したように，読解力が最も強い予測変数となった[χ^2（2）=427.39，p<.001]。正答率は，ノード3の下位群（51.2%），ノード2の中位群（62.1%），ノード1の上位群（76.4%）の順に高くなった。読解力が上がるにしたがって，格助詞「で」と「に」もより正確に選択されるようになることが分かった。さらに，読解力で分けた上位・中位・下位群でそれぞれの影響要因が異なっていた。以下に，読解力別の結果について詳細に述べる。

1）<u>上位群</u>の「で」と「に」の習得では，図1のノード4，5，10，11，12，13に示したように，場所と位置が読解力の第2に強く影響した変数であり[χ^2(1)=28.24, p<.001]，場所（80.9%）が，位置（72.6%）よりも有意に正答率が高かった。具体的な実例を見る

[1] 決定木分析（分類木分析）では，PASW Decision Trees, Version 18.0J. (SPSS Inc.2009) を用いた。

と，「学校の食堂で昼ごはんを食べた」と「デパートの前で友達と話しました」の場合，「食べる」と「話す」はともに４級相当語で早い時期に導入された動詞である。だが，位置名詞である「デパートの前」に対し，場所名詞である「学校の食堂」のほうが正答率が高くなっていた。つまり，動詞の習得時期や難易度が同等であっても，場所か位置かという名詞の違いにより，格助詞の理解が異なるということである。さらに，場所の場合は，動詞の難易度の影響が次に強い第３の影響要因で[χ^2 (1) =19.85, p<.001]，易しい動詞（86.1%）の方が難しい動詞（76.6%）より正答率が高かった。「私はこれから部屋で本を読みます」と「レストランで友達の誕生日を祝った」の場合，「部屋」と「レストラン」はともに場所名詞である。ただし，「読む」は４級語の易しい動詞であるのに対し，「祝う」は２級の難しい動詞であった。この動詞の難易度の違いが正答率の違いとなった。一方，位置の場合は，「で」と「に」の違いが第３の影響要因となった[χ^2 (1) =52.19, p<.001]。位置を表す名詞に格助詞が付く場合に，「に」（80.1%）は「で」（64.0%）よりも正答率が高かった。個別の例を見ると，「名前のシールを箱の表に貼ってください」は「子供が公園の前で遊んでいる」よりも適切に選択されやすい傾向が見られた。

２）**中位群**の場合，上位群と異なり，図１のノード6，7，14，15，16，17に示したように，格助詞「で」と「に」の習得に影響する第２の要因は，動詞の難易度であった[χ^2 (1) =53.19, p<.001]。易しい動詞の場合（66.5%）（たとえば，「彼は大学の寮に住んでいます（４級語）」）は難しい動詞（57.7%）（たとえば，「彼は大きな会社に就職している（２級語）」）より格助詞の正答率が高かった。また易しい動詞の場合には，場所と位置の影響が見られた[χ^2 (1) =19.01, p<.001]。場所（72.4%）（たとえば，「ゴミは外のゴミ箱に捨てなさい」）は，位置（62.2%）（たとえば，「会社は駅の裏にあります」）よりも正答率が有意に高かった。難しい動詞の場合には，自他動詞の影響が見られ[χ^2 (1) =43.13, p<.001]，他動詞（65.6%）（たとえば，「船の上で一日をゆっくり過ごした」）の方が自動詞（49.8%）（たとえば，「なくなった財布は学校で見つかった」）よりも正答率が高く，理解されやすかった。

３）**下位群**の場合，図１のノード8，9，18，19，20，21に示したように，中位群と同じ傾向であった（中位群の実例は下位群にも対応しているので，ここでは省略する）。まず，易しい動詞（55.8%）は，難しい動詞（46.7%）より正答率が高かった。さらに，易しい動詞の場合，第３の要因として場所と位置の影響が見られ[χ^2 (1) =6.81, p<.01]，場所（59.6%）は位置（53.1%）よりも正答率が高かった。一方，難しい動詞の場合，自他動詞が第３の要因となり[χ^2 (1) =22.83, p<.001]，他動詞（52.5%）の方が自動詞（40.8%）よりも正答率が高かった。

以上のように，「で」と「に」の習得は読解力によって第２・第３に影響する要因が異なり，中・下位群は類似したパターンを示したが，上位群は異なった傾向を示した。場所と位置の違いが顕著だったのは上位群だけであった。中・下位群では動詞の難易度と自他が強く影響しており，場所の「で」と「に」の習得に動詞が関与していることが示された。

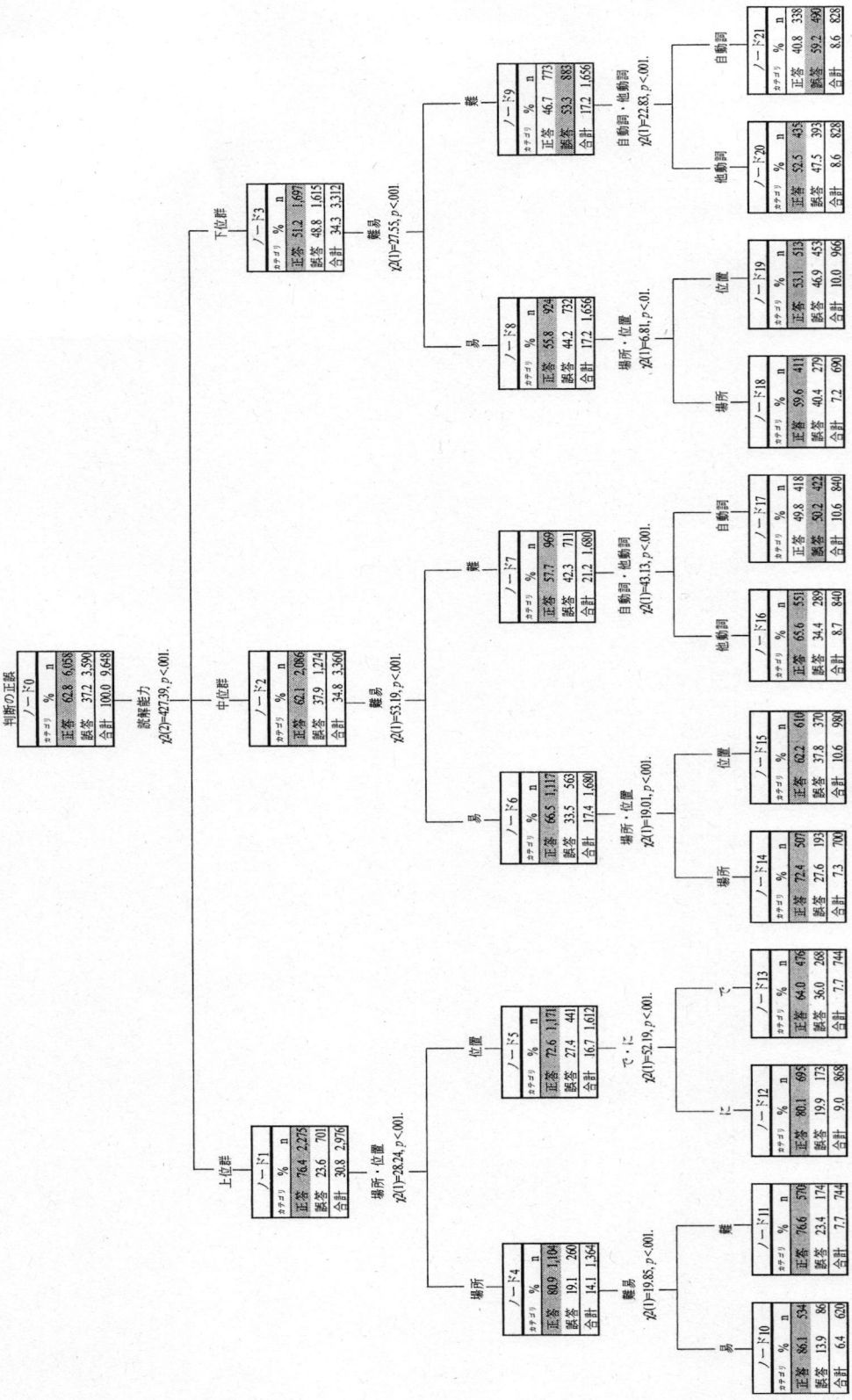

図1 格助詞「で」と「に」の習得に及ぼす諸要因

6．考察

6.1 ユニット形成について

本研究は第1の課題として，迫田（2001）の主張するユニット形成について検証した。「場所＋で」「位置＋に」のユニットが形成されているなら，本研究の結果では「場所＋で」

の正答率は「場所＋に」より，「位置＋に」は「位置＋で」より高くなるはずである。しかし，分類木分析の結果では，中位群と下位群ではユニット形成は見られず，上位群の位置の場合のみが「位置＋に」が「位置＋で」よりも高かった。上位群の「位置＋に」の正答率は80.1%であり，高い正答率を示している。日本語会話のデータベースによれば，日本語会話の中で，「で」と「に」の出現数は，「位置（～の中／上）＋に」が使用される場合が130例で，「で」が使用される場合が70例であったという（野田2001）。日本語の会話では「位置＋に」のインプット量が「位置＋で」に比べて多いということは，上位群の学習者はこのようなインプットの影響を受けている可能性があり，そのためにこうした「位置＋に」というパターンを抽出しているのかもしれない。ただし，この点については更なる検証が必要であろう。しかし，場所に関しては「で」と「に」の使い分けはランダムであり，動詞の難易が選択に影響する有意な要因であった[2]。これらのことから，上位群においても，「場所＋で」といったユニットが形成されているわけではなく，あくまで動詞によって格助詞を選択しているということが分かる。

また，ユニット形成は見られなかったが，格助詞の前に来る名詞により「で」と「に」の理解が異なっていることが分かった。図1を見ると，場所と位置の枝が分かれた場合には（ノード4と5，ノード14と15，ノード18と19），場所名詞の方が位置名詞より正答率が高かった。これは教科書の導入による影響の可能性が大きいと思われる。本研究の日本語学習者が初級段階で使っている教科書は『新編日語1』『総合日本語初級』『初級日本語』であった。3つの教科書の場所を表す「で」と「に」および名詞の導入を調べたところでは，位置を表す名詞は基本的に存在の「に」（「机の上に本があります」「猫は椅子の下にいます」など）と同時に導入されている。「位置＋に」は「ある，いる」の導入以外にはあまり見当たらず，そのほかにも「位置＋で」の用例は教科書にはさほど多くなかった。それに対し，「場所＋に」はやや用例が少なく，教科書の会話や本文中に現れており，「場所＋で」は「で」の導入時以外にも多くの用例が見られる。このように教科書ではむしろ「場所＋で／に」の組み合わせの出現数は「位置＋で／に」より多くなっていることから，学習者の場所名詞の理解が促進されているのではないかと考えられる。

6.2 中国語の「在」の干渉について

本研究で使われている調査文の「で」と「に」はともに中国語の前置詞「在」に対応し，仮に中国人日本語学習者が母語の中国語の「在」の影響を受けているなら，場所・位置，またどのような動詞にも関わらず，格助詞「で」と「に」の正答率は同じであろう。分類木の樹形図の結果では，中位群と下位群において「で」と「に」の枝は分かれず，動詞の難易度により，正答率が異なっていた。易しい動詞の場合，場所名詞は位置名詞よりも有意に正答率が高かったが，難しい動詞の場合，場所と位置の要因は影響せず，自他動詞が

[2] 分類木分析では有意な変数は樹形図に表示し，有意でない変数は樹形図に表示しない。上位群の場所の下に「で」と「に」の枝がないため，「場所＋で」と「場所＋に」の正答率が同じであると意味している。

影響していた。つまり，名詞が場所か位置かは，動詞の意味が分かった上での格助詞選択における学習者の一つの手がかりになっており，意味が分からない動詞の場合には，これらの手がかりを使用することができない。したがって，学習者は動詞の意味を基本とし，その次に場所か位置かを判断材料としていると考えられ，母語の中国語の「在」の干渉は見て取れなかった。

興味深いことは，難しい動詞の場合，自他動詞が中位群と下位群の学習者の格助詞「で」と「に」の選択に影響している点である。本研究は蓮池（2008）と同じように自他動詞の要因を設定し，さらに中国語と日本語の自他動詞の対応を考慮して，項目の８割が中国語と日本語の自他が対応している。つまり，言語間の自他の違いによる影響はそれほどないと考えてよいはずである。それにも拘らず，「～で／に＋他動詞」は「～で／に＋自動詞」より正答率が高くなっていた。守屋（1994）は助詞・自他動詞の習得についてアンケート調査を行い，中国人日本語学習者の場合，自動詞は他動詞より習得されにくい傾向があったと報告しているが，自他動詞の習得は「で」と「に」の判断にも影響している可能性がある。本研究で使われている自動詞は「立つ，集合する」などの無対自動詞が多く，有対自動詞は「見つかる，ぶつかる，落ちる」の３例のみであり，同様に本研究で使用した他動詞も無対他動詞が多くなっていた。したがって，有対による形態的な混同は非常に強い影響を与えていたとは考えにくい。他動詞は有生の主体者が対象に対して何らかの意志をもって働きかけるといった特徴を持つものが多いが，そうした動作性が意識しやすいことが「で」と「に」の適切性の判断に影響しているのかもしれない。この点については，さらなる検証が必要であろう。

6.3 読解力について

分類木分析の樹形図に表示されるように，中国人日本語学習者は場所を表す格助詞「で」と「に」の習得において，最も強く影響する要因は学習者の読解力であった。下位群から上位群へと「で」と「に」の正答率が上がっており，読解力が上がるにつれ，「で」と「に」の理解も進んでいくようになることが分かった。本研究の読解力は語彙，文法等の言語知識から文章の意図を読み取る総合能力の１つと位置づけている。このような読解力によって，「で」と「に」の習得に影響する傾向が異なっていたのは前述の通りであるが，読解力がまだ低い学習者に強く影響する要因は動詞の難易度であった。中・下位群の学習者は，日本語の動詞の知識が不十分なために，動詞に対して適切な助詞を選ぶことができなかったのであろう。つまり，動詞を中心に格助詞を使い分けている点において，日本語母語話者が述語の種類によって格助詞「で」と「に」を選択する（野田 2001）のと同じように，中国人日本語学習者も，述語の種類によって格助詞を選択していることが明らかになった。

6.4 格助詞「で」と「に」の理解プロセス

以上のように，本研究は場所を表す格助詞「で」と「に」の習得において，ユニット形

成と「在」の干渉を検討してきた。上記の結果に基づいて中国国内にいる中国人日本語学習者の格助詞の「で」と「に」の理解において，次の図２のようなプロセスで理解しているのではないかと推測できよう。まず格助詞の問題を見て，最初の手がかりとなるのは動詞である。動詞が易しければ，次のヒントは格助詞の前に来る名詞であり，その名詞が場所を表すもののほうが選択しやすく，位置を表すものなら比較的選択が困難になる。それに対し，最初の手がかりとなる動詞が難しければ，動詞の特性に注目して，動作の明示性から他動詞はやや助詞が判断しやすく，自動詞なら比較的難しくなる。上位群にとっては動詞の知識がある程度備わっているためこのようなストラテジーは取られず，直接格助詞前の名詞に着目していた。つまり図２の左側の，動詞が易しい場合のプロセスである。またインプットの影響からか,「位置＋に」と「位置＋で」のパターン化が見られた。同じように動詞が分かっても完全に正しく判断できるとは限らず，場所の下の階層に易しい動詞と難しい動詞で枝が分かれていた。ただし，難しい動詞でも（ノード 11）76.6%の正答率があり，かなり習得できているといえよう。

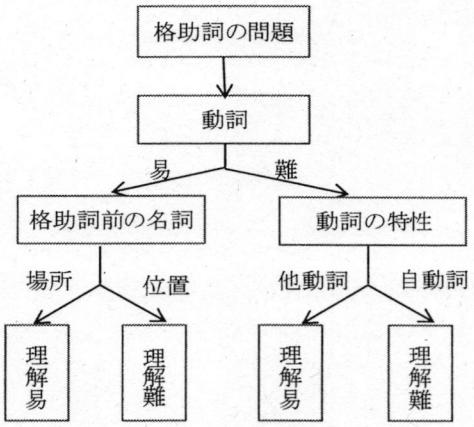

図２　格助詞「で」と「に」の理解プロセス

本研究では，動詞の難易，自他を影響の要因として設定したが，動詞を中心に格助詞が選択されているのならば，他の動詞特性も格助詞の選択に影響を与えるはずである。これについては，今後の課題としたい。

参考文献

市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク.

岡田美穂・林田実（2007）「日本語学習者による格助詞の混同－存在場所の「に」と範囲限定の「で」」『日本語教育論集』23，pp.3-15，国立国語研究所.

上村文子・舛井雅子（2002）「第２言語としての日本語における格助詞習得の諸問題」『熊本大学留学生センター紀要』６，pp.27-54.

久保田美子（1983）「第２言語としての日本語の縦断的習得研究」『日本語教育』82，pp.72-85.

国際交流基金（2002）『日本語能力試験出題基準　改訂版』凡人社.

迫田久美子（2001）「第２章　学習者の文法処理方法」野田尚史ほか『日本語学習者の文法習得』, pp.25-44, 大修館書店.

玉岡賀津雄（2006）「決定木分析によるコーパス研究の可能性：副詞と共起する接続助詞「から」「ので」「のに」の文中・文末表現を例に」『自然言語処理』13（2），pp.169-179.

津留紀子・舛井雅子・柳田恵里子（1998）「会話力の獲得を中心とした初級日本語における助詞習得の問題とその指導」『熊本大学留学生センター紀要』２，pp.13-33.

野田尚史（2001）「第３章　学習者独自の文法背景」野田尚史ほか『日本語学習者の文法習得』, pp.45-62, 大修館書店.

蓮池いずみ（2004a）「場所を示す格助詞選択のストラテジー」『言葉と文化』５，名古屋大学国際言語文化研究科日本言語文化専攻，pp.105-117.

蓮池いずみ（2004b）「場所を示す格助詞「に」の過剰使用に関する一考察」『日本語教育』122，pp.52-61.

蓮池いずみ（2008）『日本語学習者の空間表現使用における簡略化と言語転移－格助詞「に」と「で」の使用を中心に』名古屋大学博士学位論文.

福間康子（1996）「作文からみた初級学習者の格助詞「に」の誤用」『九州大学留学生センター紀要』８，pp.61-74.

水谷信子（1987）「助詞指導」『日本語教育』62，pp.13-26.

村松恵子（1987）「日中語対照研究--中国語の干渉による日本語格助詞の誤用分析」『日本福祉大学研究紀要』73，pp.27-47.

守屋三千代（1994）「日本語の自動詞・他動詞の選択条件－習得状況の分析を参考に」『講座日本語教育』29，pp.151-165，早稲田大学日本語教育センター.

吉川武時（1987）「教科書から見た助詞指導の問題点」『日本語教育』62，pp.1-12.

Tamaoka，K. & Ikeda，F.（2010）Whiskey，or Bhiskey?: Influence of first-element and dialect region on sequential voicing of shoochuu.『言語研究』137，pp.65-80.

Factors influencing acquisition of the locative case-markers *-de* and *-ni* by native Chinese speakers learning Japanese

Xiangjuan CHU（Tianjin Foreign Studies University；Nagoya University）

Katsuo TAMAOKA（Nagoya University）

Kyoko HAYAKAWA（Nagoya University）

Abstract:

The present study investigated factors influencing the acquisition of the locative case-marker *-de* and *-ni* by native Chinese speakers learning Japanese studying at a university in China.We set up four linguistic factors attribute to the level of acquisition: (1) difficulty level of verb, (2) transitivity, (3) types of nouns (i.e., locational and placial nouns) preceding the locative case-maker, and (4) locative case-maker *-de* and *-ni*. In aditition, as a fifth factor (5), based on a Japanese reading test (16 questions), 201 native Chinese speakings were divided into three Japnese-proficiency groups:a high, intemediate and low group.The participants were asked to choose the single most appropriate case-marker out of four choices which fits to a sentence (48 in total). A classification tree indicated the following results: (i) students' reading ability was the strongest factor influenced the accuracy of the locative case-markers, (ii) within the high proficiency group, the difficulty level of verbs was the secondary factor for locational noun, whereas the locative case-marker was the secondary factor for placial noun, and (iii) for both

intemideate and low proficiency groups, students' lexical knowledge was elucidated by verb difficulty levels and transitivity.These findings suggest that the most important factor for the acquisition of the locative case-markers is the learners' reading ability, while the other four factors affected as secondary factors.

Keywords: acquisition of locative case-marker, unit, classification tree, native Chinese speakers learning Japanese

付記　読解力別の各問題の選択者数

NO.	問題文	上位群	中位群	下位群
1	今回のイベントは展示会として文化会館で開催する。	57	54	44
2	学校の食堂で昼ごはんを食べた。	59	59	48
3	居酒屋でカクテルを飲んだら，意外とおいしかった。	56	57	47
4	母が庭で忙しく洗濯物を干している。	48	50	37
5	私はこれから部屋で本を読みます。	52	48	29
6	レストランで友達の誕生日を祝った。	59	59	54
7	友達と駅の前で待ち合わせることになった。	33	32	21
8	船の上で一日をゆっくり過ごした。	48	47	37
9	バスの中でたばこを吸わないでください。	49	49	44
10	人の前で悪口を言ってはいけない。	29	38	27
11	コックさんは豆腐を手のひらの上でサイコロ状に刻む。	25	35	30
12	デパートの前で友達と話しました。	48	40	30
13	彼は東京で働いている。	51	44	38
14	アルバイトの人は休憩時間に社員食堂で休んでもいい。	56	55	45
15	なくなった財布は学校で見つかった。	50	47	34
16	昨日，教室で彼に会った。	57	54	45
17	あの町でひどい目に遭った。	51	43	32
18	（軍事訓練の時）芝生で学生たちが這っている。	31	29	20
19	交番の前で道に迷いました。	43	31	18
20	あの木の下で待っていてください。	40	39	31
21	小鳥は木の上で鳴いている。	40	35	44
22	橋の上でバイクとぶつかった。	47	37	42
23	子供が公園の前で遊んでいる。	47	50	32
24	摩天楼の下で舞う歌姫という番組がある。	27	38	23
25	機械を工場の一角に配置するようにお願いします。	42	43	29
26	（実験の時）先生：みなさん，手をテーブルに当ててみてください。	58	45	45
27	花の並べ場所ですね，ええっとじゃこの花を会場の入り口に並べてください。	40	41	32
28	引越しの時，昔のアルバムを実家に残してきた。	56	40	34
29	ゴミは外のゴミ箱に捨てなさい。	53	51	48
30	傘をドアの後ろに置いてください。	56	52	39
31	子供たちはビー玉を土の中に埋めて遊んだ。	52	43	31
32	ここは駐車場ですよ。入り口の前に車を止めないでください。	35	31	34
33	名前のシールを箱の表に貼ってください。	56	48	38
34	ボーっとしていて，線路の上に切符を落としてしまいました。	42	35	29
35	私の写真は写真集の５ページ目の下に載せたよ。	55	53	41
36	子供を自転車の後ろに乗せた。	57	50	35
37	彼女は今，日本にいます。	58	51	40
38	彼は大きな会社に就職している。	36	31	19
39	来月の３日は，大阪に滞在する予定になっています。	49	44	43
40	紙くずや空き缶が公園に散らかっていた。	46	28	20
41	彼は大学の寮に住んでいます。	52	47	43
42	泥棒がスーパーに現れた。	36	26	23
43	改札口の左に立っている人は誰ですか。	49	48	42
44	会社は駅の裏にあります。	61	57	44
45	たくさんの枯葉は砂場の上にいっぱい落ちた。	49	43	34
46	出発は水曜日の９時です。広場の前に集合してください。	45	43	45
47	私は李さんの隣に座っています。	56	45	41
48	震災後，瓦礫の中に電車の一部が転がっていた。	33	21	16